再考・方法としての生活史研究

――その断片と回想――

安田常雄

一　方法としての〈生活史〉とは何か

この文章は、これまで折にふれて書いてきた生活史の文章を振り返りながら、あらためて、その方法的な意味を考えてみようとする試論である。

私は、もともと近代日本の「経済史」の専攻であるが、大学院に進学する頃から、その研究テーマを「日本ファシズムの歴史構造」と決めて、研究を始めてきた。それは「日本経済史」研究のオーソドックスなテーマである、産業史や農村史などではなく、当時最も関心があった一九三〇年代論、特にファシズム研究に焦点をあてようと思っていた。当時の同級生のなかでも「ナチス経済」をテーマに選んだ友人もあり、それは一つの時代の気分を伝えるものであろう。

一九七〇年前後の時代において、「ファシズム研究」は、すでに政治学・政治思想史の分野の研究として知られていたが、そのときの私の関心は、いわゆる丸山ファシズム論（『現代政治の思想と行動』など）で展開されたドイツファシズム論の認識枠組みを前提に、その日本的特殊性を分析するという枠組みではなかった。

いまそれを結論的に述べるとすれば、私の関心は、〈地域〉と〈生活〉という視角から見たファシズム論であり、具体化すれば、〈地域〉に暮らす〈生活者〉とファシズムという視点にあったと思われる。それは素朴にいえば、ファシズムは、〈生活者〉の〈生活〉を丸ごと摑んで、ファシズムに統合していくのであり、人びとは強権的に否応なくそれに組み込まれ、自らその担い手になっていくのである。そのとき、人びとの生活は、ファシズム的生活に改変され、自発的にその体制に同調を強いられていく。そのとき、一人ひとりの人びとに固有の生活は、どのようになっていくのだろうか。また、そのような改変と組み換えが起きる場所が、〈地域〉であり、その〈地域〉という歴史の舞台のダイナミズムを探りたいというのが、初発の問題意識であったと思われる。その意味では、私にとって「生活史」とは、いわば衣食住の細部を内に含んだ暮らしの歴史であるのは当然であるが、ある特定の時代と空間に規定された、矛盾を含んだ関係のありかたという問題とイメージされていたことはまちがいない。

いまから振り返ってみれば、こうした〈生活〉と〈地域〉の組み合わ

せという問題意識は、それなりの前史をもっていたと思われる。細部を省いて結論的にいえば、〈生活史〉の重要さという認識については、それ以前からの『思想の科学』などの体験が自分のなかに根を下ろしており、またファシズムという問題を〈地域〉という舞台で考える大きなヒントとなったのは、偶然に読んだある外国のファシズム研究者の本であった。それは、アレンという人の『ヒトラーが町にやってきた』（西義之訳、番町書房、一九六八年）という本であった。

（1）〈生活史〉と『思想の科学』体験

ごく簡単に私の『思想の科学』経験について書けば、雑誌『思想の科学』を拾い読みし始めたのは、高校生のとき以来であり、正確にいえば、中央公論社版から自主刊行の時代であり、昭和三十四年（一九五九）から、いわゆる「天皇制特集号廃棄事件」を契機に独立した同三十七年（一九六二）の思想の科学社版の頃であった。そしてそこからこの雑誌に書く人びとの著作をさかのぼって読んでいた時代であった。その後、研究会の仕事との関わりで、昭和二十一年（一九四六）創刊以来の『思想の科学』、そして同二十八年（一九五三）四月から翌二十九年五月に刊行された、第二次『思想の科学』（『芽』）の復刻版（久山社、一九九二年）を刊行し、そのなかで私は、それ以後の時代も含めて「変容の軌跡と意味 第1次〜第5次『思想の科学』1946年5月〜72年3月」（『思想の科学 総索引 1946-1996』思想の科学社、一九九九年）という「はしがき」を書いている。その初期『思想の科学』関係の文章で、そののちも大きな影響を残した文章を、二つだけあげれば、一つは、鶴見俊輔（一九二二〜二〇一五）の『プラグマティズム入門』の一節であり、もう一つは、同じく鶴見の『日本の百年』第一巻の「解説」であった。

まず前者では、次のような文章がその象徴である。

> 新しい哲学は、具体的事物と具体的価値の中にしっかりと根ざすものとしたい。その哲学において展開される抽象的、一般的原理、日常生活における、個別的事物ならびに価値に結ばれる事になる。どぶんと飛び込んで具体的事物および価値の底深くひたると共に、直ぐさま空高く飛び上がって抽象原理の域に行きつくだけの肺活量を持つ。さらに抽象原理の雲の上で長く昼寝をすることなく、また具体的事物および価値の海中にもどるだけの元気がある。この行き戻りつのこつを心得たものこそ、新時代の哲学者なのであり、水陸両棲のこの技術を人々に植えつけるこそ、新時代の哲学教授法だ。これは工夫と熟練を要する。
>
> （鶴見俊輔『プラグマティズム入門』現代教養文庫、社会思想研究会出版部、一九五九年、二〇七〜二〇八頁、傍点原文）

ここに描かれているのは、鶴見の「方法としてのプラグマティズム」の機能的原理の根にある方法である。哲学における抽象的一般原理が、日常生活の具体的事物と価値と結びつき、再び「空高く飛ぶ」という「行きつ戻りつ」の往復運動のなかで、「哲学」（思想）と生活の機能的関係がダイナミックに説かれているのだ。ここで「生活史」とは、絶えず一般的な哲学原理を、具体的な事物と結びつけ、抽象的一般原理を相対化するキーワードとして定義されている。

（2）近現代史の方法と接点――『日本の百年』――

それでは、第二の『日本の百年』「解説」では、「生活史」はどのようにとらえられているのだろうか。周知のように、この『日本の百年』全一〇巻は、「記録現代史」と名づけられ、明治維新から一九六〇年安保頃までの日本近現代史のきわめて多様な記録を資料に描き出した、モンタージュの方法による斬新な試みであった。これが「昭和史」論争に対して、鶴見らが批判的に提示した方法であった。

この全一〇巻の最初の巻で、その編集のねらいを次の三つの視点としておいている。第一は、「大きな事件と小さな人とのくみあわせ」である。

わたしたちは、ここではむしろ、それぞれの時代の小さな人が同時代を生きた根拠（生きがい）をしり、それぞれの人の内側から同時代を見ようとした。単一の大きな人を設定することは、不必要に同時代に悪玉をつくりだす結果となる。むしろ、ある局面の行動者の記録を、別の局面の行動者の記録ととなりあわせにおくという構成をとおして、それぞれのもつ視点のかたよりがあきらかになるような歴史記述の方法をとった。この意味では、この歴史は、紙面の制約のゆえに全面的にとらえることのできなかった場合はあるが、できるかぎり、これまでの歴史の本で切られ損になっている人の復権をめざした。歴史記述の進歩とは、新たな悪玉さがしよりも、もっとも広く深く人間の復権をめざすことにあると思う。

第二の視点は「過去の眼・未来の眼・同時代の眼」である。そこでは「この十冊は、空を飛ぶ鳥の眼から見た歴史の見とり図と対照になるような、地を歩く人の眼から見た現代日本の案内図である」と書かれ、同時に「日本の近現代史の構造についての想定の上にたった架空の眼」の必要を説いている。そして第三には、「余白のある歴史」の重要性に触れている。

この本は法則的にかっちりとくまれた歴史の本とちがうゆるい構図をもつ。ここには、はりあわされた資料のとなりに、読者が、自分のその時にもった同時代体験をさらにつけくわえてはりあわせることによって、ここにあるそれぞれの部分が、より限定された意味を持つようになる。同時代の歴史が当然にそうであるように、この本は、余白のある歴史である。

ここには再定義された「方法としての生活史」のイメージが提出されているのである。そこでは「生活史」とは、人びとの日常生活の衣食住を中心とする事物の具体像そのものであり、それ自体の具体的記述がイメージされている。しかし同時にそうした「生活史」が「素材」として重要である以上に「方法」として多くの視点を提起するというのが、この本のスタンスであったことが重要である。

それでは〈地域〉の視点とは、どのようなイメージとして私にやってきたのだろうか。その一つのきっかけになったのは、前述のように、アレンというアメリカの研究者が書いた『ヒトラーが町にやってきた』という本（原書は、William Sheridan Allen, “The Nazi Seizure of Power: The Experience of a Single German Town 1930-1935”,Quadrangle

Books,1965）であった。これは、日本語タイトルを見ると、一般読み物風であるが、著者の学位論文であり、その内容は、ナチスの台頭と政権獲得前後の一九三〇年から三五年にかけての時期、ある北ドイツの人口一万人ほどの小さな町がどのように変化したかを克明に追った仕事であり、日本でも「まことに見事なルポルタージュ」（村瀬興雄、前掲『ヒトラーが町にやってきた』表紙カバーの帯による）と評されており、また資料的には当時の新聞、パンフレット、ビラからの引用、当事者の証言などをつなぎ合わせて再構成されたものと評価されていた（柴田翔、同上）。

それはのちの研究史的視点からすれば、当時の「地域研究」（Area Study）の視点に立つ作品であり、一九七〇年代以後、日本でも関心が広がっていく広義の「社会史」的研究の先駆的作品の一つであった。

当時、「日本ファシズムの歴史構造」を考えたいと思っていた私にとって、この本の〈地域〉の視点、そこには当然のことながら、そこで暮らす生活の構造が基底にあり、その上に多様な社会運動や政治運動が展開した舞台であった。

この本の方法的視点と、視点の多様性、いわゆる論文スタイルとはちがう文体と歴史叙述などが少なからぬ触発力をもっていたと思われる。素朴にいえば、第一に〈地域〉を設定すること、第二にそこで展開した多様な社会運動のダイナミズムと担い手である運動家（一面では一人の生活者）の思想的変化を追うこと、そのためにはいわゆる「聞き書き」調査が不可欠であること、第三にそうした運動展開の基底に、いわば普通の人びとの「生活の歴史」が沈殿していることを忘れないことなどが、当時考えていたことのラフな骨組みであった。それは本稿の「生活史」という眼から見れば、「生活史」と「運動史」、「生活史」と「思想史」、そして「生活史」と「時代史」をある緊張のなかで考えることであり、そうした視点のなかで、「生活史」は単なる「素材」ではなく、一つの「方法」となるのではないかという直感であったのかも知れない。鶴見俊輔の表現を借りれば、

> 方法と素材とは、いちおうの分離をしたとしても、同じ状況の中ではたらくものとしての制約をうけている。分離する以前の方法と素材とは、同じ状況の中でつながっている。素材として考えられているものの中に方法があり、方法と考えられているものが素材となりうるような連続性として、両者をとらえるべきだ。
>
> （「素材と方法」『思想の科学』一九七二年三月号）。

私はこのようなプロセスをあれこれ考えながら、〈地域〉を一九二〇年代後半から三〇年代の長野県と決め、その間に展開した県内の多様な運動の基礎資料の調査とそれを同時代の「現場」で担った「運動家」の人びとの話を聞く調査を始めることになったのである。

二　『日本ファシズムと民衆運動』の頃
――地域・生活・個人史と集団史――

こうした長野県の農村社会運動の調査は、幸いなことに一冊の本にまとめることができた。昭和五十四年（一九七九）十一月のことであった。いま、紙数の限定があるが、その特徴をまとめると以下のようになる（「第2図 長野県農村社会運動主要組織・運動家の系譜」参照）。

第一は、対象とした時期は、ほぼ昭和二年（一九二七）年から、同八年（一九三三）であり、これは長野県北部で日農（日本農民組合）が結成され、東信（上田・佐久など）で農民自治会が運動を開始した時期にあたっている。そして県内各地域の運動は、その後の分裂・統合・再統合などの曲折を経て、昭和恐慌期（昭和五～七年）には、ほぼ全農（全国農民組合・全国会議派）にまとめられ、左派系農村社会運動の全盛期を迎えることになる。周知のように、長野県は養蚕を基軸にした経済構造の上に成り立っており、それゆえ、昭和恐慌期の繭価下落の影響は社会生活に大きな影響を残した。運動は高揚し、それは小作争議ばかりではなく、電灯料値下げ要求などの生活要求運動としても活発化した。また運動の指導理念は、同時代のマルクス主義的イデオロギーが力をもち、国家権力との対立も激化していった。こうした流れに終止符を打ったのが、昭和八年（一九三三）の「二・四事件」（当時「長野県教員赤化事件」とよばれた）であり、これによって左派系の農村社会運動はほぼ壊滅していった。

第二として、長野県農村社会運動の特徴は、そのスタート時点において、農民自治会とよばれる運動から始まったことであった。これは、「農村青年」の生き難さを根底に自然発生的に始まった運動であり、彼らはその運動理念を「権力―自治」の対抗と設定し、広範で多様な運動形態を模索していったことである。その後この運動に参加した若者たちは、一部は左翼的運動にも関わり、全体として同時代の県内農村社会運動の人材供給源としての役割を果たしていくことになった。

第三の特徴は、こうした北信・東信の運動とは独立に、中信地方を中心に、「農本主義」思想を組織理念とする右派の農村社会運動が台頭し、昭和恐慌

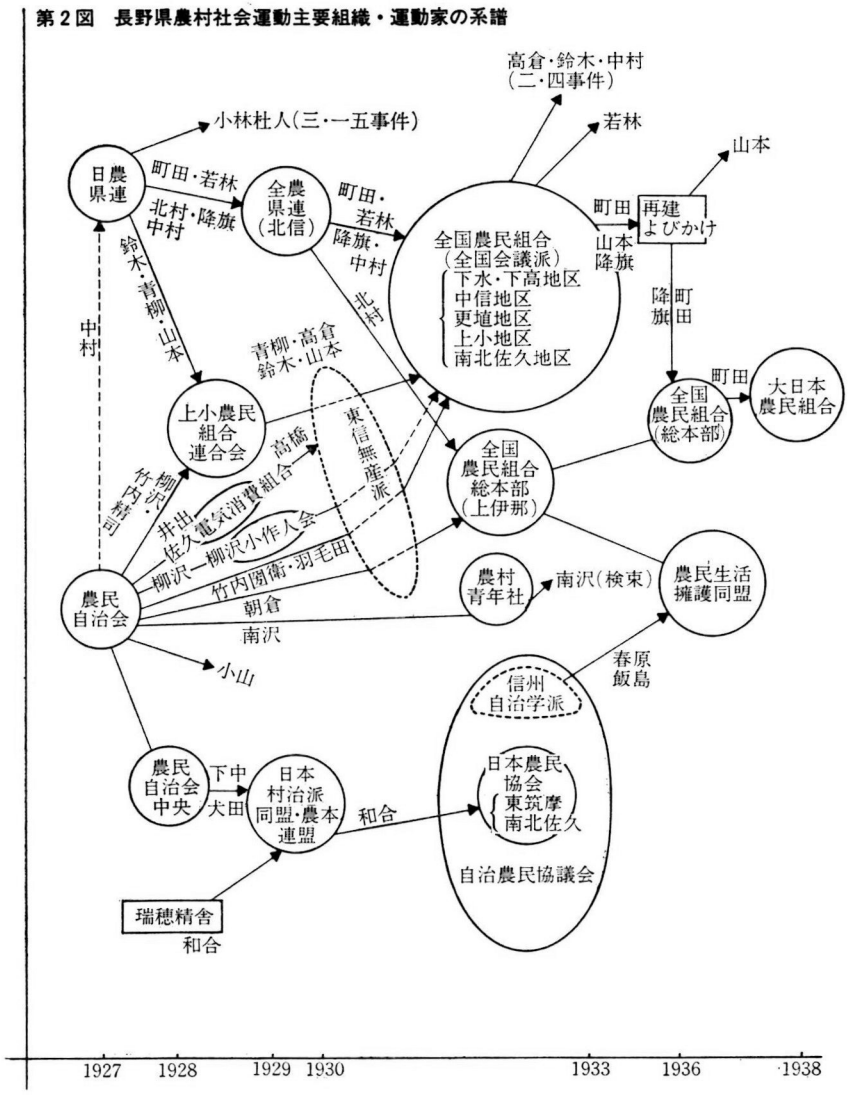

図　「第2図 長野県農村社会運動主要組織・運動家の系譜」

期には、全農（全国農民組合・全国会議派）と並ぶ勢力となっていったことである。この運動を率いた和合恒男（一九〇一～一九四一）は、この時期には、水戸の農本主義者橘孝三郎（一八九三～一九七四）らと「自治農民協議会」を結成、昭和七年（一九三二）には、「農村救済」を旗印に国会に向け、大規模な農村救済請願運動を展開し、折からの五・一五事件とも関わって、全国的な影響を与えていくことになった。

当時の私は、同時代に多様な組織に関わった運動家の方たちの「聞き書き」を行っており、多様な人びとの「生活史」を記録していた。そのなかで、農民自治会の小山啓吾さん、日農の運動家で「転向」した小林杜人さん、上小農民組合から全農全国会議派の書記局員であり、また宗教思想に深い関心をもっていた鈴木茂利美さんなどの記憶がいまなお鮮明に残っている。いま「方法としての生活史研究」という文脈で考えれば、その核心は、一人ひとりの個人の風貌とその生き方の記録としての生活史なのである。その意味で、本書の「あとがき」に書いた「感想」は、私にとっての「方法としての生活史研究」に触れているように思われる。

> 本書もまた、多くの歴史研究とともに、その時代に生きた幾多の無名の人々の生活の軌跡によって、根本的に支えられているにちがいないと思う。それは、調査の過程においていわば偶然のように出会い、お話を伺うことのできた旧農民運動家の人々はいうまでもなく、ほとんど明確な軌跡を歴史の上に刻むことなく、ある時〈運動〉に加わり、また〈運動〉からはなれていった人々のくらしの軌跡であろう。また、彼らとともにその生活を生きた、多くの女性の、一層厳しい日常のたたかいでもある。ここには、疑いもなくまた有名無名に関わりなく、ひとりひとりの、かけがえのない一回かぎりの人生の軌跡があったはずである。当時の、狂気に満ちた国家権力の弾圧のなかで、いわば、記録として保存するよりも的確に廃棄することを目的として作成された、数知れぬ方針書・指令・ニュース・ビラなどの文書は、日付さえ定かでないものも多く、また署名を通して歴史に記憶されることもなく歴史の底に消えていったと思われる。しかし、たとえば、あの昭和恐慌の谷間にある窮乏の農村の片すみで、暗い電燈をたよりに、背をまるめて鉄筆を走らせていた、多くの無名の人々の姿を忘れることはできないのである。無論、大切ではあるが〈運動〉は生活の一部にすぎず、その底には日々の生活の地平が横たわっているというべきかも知れない。また、今日からふりかえるならば、そこには幾多の過剰な思いこみがあり、また明確な誤りも含まれていたにちがいない。しかし、彼らが鉄筆の軌みを通して、何を描き、何を訴えようとしたのか、またその希求の歴史的・論理的帰結はなんであったのか。わたくし（たち）は、ただ、こうした生活の軌跡として刻まれた歴史に、いかにむかいあったかを報告する以外にないような気もするのである。本書は、その意味において、筆者自身によって読まれた無名の人々の人生であり、その貧しいひとつの報告書にすぎないのである。
>
> （五八五～五八六頁、傍点原文）

私の農村社会運動史の研究は、長野県の本がきっかけの一つになり、次に埼玉県の農村社会運動、特に在地の詩人にして運動家の渋谷定輔（一九〇五～一九八九）についてのモノグラフを書くことになるが、それ

は本稿の「方法としての生活史研究」という視角では長野県の本とほぼ共通ということができるだろう。詳しくは、『出会いの思想史＝渋谷定輔論』（勁草書房、一九八一年）を参照されたい。

ただ一つの記録として回想すれば、この本のタイトルは、次のような鶴見俊輔の視点との接点に起源をもっている。当時、鶴見は上田自由大学を推進した在野の哲学者、土田杏村（一八九一～一九三四）の復権を唱えた文章で、次のように書いていた。

> 一人の人の個性は、その人の中でさまざまの人々がどのようにたがいに結びついていたかに由来する、という説がある。その人の中で、どんな人々がどのようにたがいに会ったか。もう一つ、それとは独立の問題として、その人をとおして、どんな人々がどのようにおたがいに会うことができたか。こういう二つの問題をたてて、日本の思想史上の人物を見る時、私たちは、これまでに書かれた思想史の見落としに気がつく。
>
> （鶴見俊輔「日本の地下水」『思想の科学』一九六九年八月号）

ここで取り上げた渋谷定輔は、その人生の重要な局面で、さまざまな人との出会いがあり、それが彼の「生活史」と思想を形造ってきた。それは、初期の細井和喜蔵との出会いに始まり、哲学者土田杏村、運動家中西伊之助（一八八七～一九五八）、さらに全農全国会議派での詩人伊東三郎（一九〇二～一九六九）や関谷留作（一九〇五～一九三六）らとの出会い、さらにのちに『死霊』の作者として知られることになる埴谷雄高（一九〇九～一九九七・当時、全農全国会議の『農民闘争』刊行のキャップの一人）、そしてのちに渋谷と結婚する渋谷（旧姓池田）黎子（一九〇九～一九三四）との出会いなどを通して、生きてきたのであり、それが渋谷の「生活史」そのものであったと思われる。そうした文脈のなかで、私はその「生活史」の意味について、次のようにコメントしている。

> ひとりの人間の内側に住む沢山の他者と、その人の外的行動を媒介として多くの人々がじゅず玉のようにつながる構図は、知識人・民衆を問わず、人間の内面・外面にわたる社会的行動の総体を照らし出す。そこでは、書物か人間かという区別も消え、書物との出会いも人物との出会いと同じ構図のなかに位置づけられる。一言でいえば、人間の〈問題〉との出会いといってよい。
>
> （『出会いの思想史＝渋谷定輔論』）。

それは別の言い方をすれば、「自分とは何か」という問いを基底におき、状況のなかでの多様な他者との多層的なつながりを通して形成される「生活史」というイメージにつながっている。それは、「個人」の「生活史」を基底におきつつ、社会のなかでの多様な他者とのつきあいを通して形成されるコミュニケーション的生活史という位相ということができるだろう。これが「方法としての生活史研究」の重要なもう一つの視点であった。

当時の私は、一方で「二・四事件」以後、戦時体制期の長野県について、「続編」を書きたいと思っていた時期もあった。そこではもはや運動が壊滅され、日中戦争の展開とともに、戦時下農村の再編成が進んでいく時代であった。そこで私が考えていたのは、運動がなくなったとこ

ろでの「抵抗」とは何かというテーマであった。しかし、残念ながら、資料も乏しく、僅かに、「戦中期民衆の生活意識」（原題「戦中期民衆史の一断面」『年報・近代日本研究』№5、一九八三年十月、山川出版社、のち安田常雄『暮らしの社会思想』勁草書房、一九八七年）でその一断面に触れたに過ぎない。これは、信濃毎日新聞社編『農村青年報告』全三冊（竹村書房、一九四〇～四一年）を資料に、農村青年の生活記録という眼から、戦時下農村の問題点を探ったものであった。

ただ振り返って、この時点で私が想定していた「ファシズムと生活史」という問題枠組みの一端は、「民衆のファシズム」という文章に残されており、ここでは古い文章ながら、以下に参考資料として「復刻」しておきたい。そこでのポイントは、「民衆のファシズム」と「民衆の反ファシズム」の両義性と重層性という問題であった。

ぼくたちにとって、子どもの本がおもしろいのは、子どもの時代がなつかしいからではない。おそらく、子どもの感覚と観念のりんかくの明晰さが、ぼくたちの歪みを鮮やかに映し出すからではないか。

近頃、おくればせながら読んだ、H・P・リヒター『あのころはフリードリヒがいた』（上田真而子訳、岩波少年文庫、一九七七年）は、ファシズムの時代における民衆の生きる意味を重く問いかけている。これは〝ぼく〟（ドイツ人）と同年の友人フリードリヒ（ユダヤ人）、及びその家族が、ドイツファシズムの時代（一九二五～一九四二年）をいかに生きたかの物語である。

ここでは二つの点だけをとりあげてみたい。

第一は、この物語が、国家の権力者でも資本家でも、また戦闘的な労働者階級でもなく、普通の民衆に焦点をあて、さらに民衆の内部に深く沈殿する差別感覚の存在と、時代状況の緊迫化に伴って、それが差別的行動に転化される構造を描いている点である。その意味でこの物語は、ユダヤ人家族が、しだいに社会から追いつめられ、国家によって破壊されていく物語である。

民衆に内在する差別感情は、まず悪口、落書として姿をあらわし、ユダヤ人商人への不買へと発展し、さらに借家からの追い立て、解雇の強制をへて、民衆自身の手による集団破壊へと昂進する（究極的には強制収容所）。

つまり、意識の内部に沈潜した差別感覚が、ナチの政権掌握を契機に行動に転化され、「善良」な生活者が「急進ファシスト」に転化していく構造が描かれているのである。例えば、ユダヤ人寮に対する群衆の襲撃の場面は、ただ観ていた主人公をもしだいに破壊の情熱にかりたて、行動にまきこんでいく恐ろしさをリアルに描き出している。

第二に、この物語は、ドイツ人家族が、親しいユダヤ人家族を善意のままに見すてていく物語でもある。長い失業の苦労がヒトラーの政権掌握によって終わり、より「安定」した生活のために「入党」（ナチ党）を決意するドイツ人家族と、ユダヤ人ゆえに失業を強いられ、強制収容所への暗い予感に脅かされるユダヤ人家族との、親密な共感（友情）を抱きながらもひきさかれていく対比が鮮やかである。二人の子どもが見ている前での「入党」を告げる父親同士の対話は、互いに相手への共感と理解、思いやりを残しながら、両極

に訣れていかざるをえない瞬間の緊張が描かれているのである。

「話しにくいことなんですがねえ！」「わたしは、党に入ったんです」

「知っていますよ！　お宅のぼっちゃんが教えてくれたんですよ」

「しかし、わたしには、よく理解できることです」

「わかってくださるでしょう、シュナイダーさん。わたしは長い間失業していたんですから。それがヒトラーが政権について以来、職ができたんです。しかも、思っていたよりずっといい職がね。助かっているんです、うちは」

「なにも、やましく思うことはないですよ、いや、ほんとうに！」

「うちじゃあ、はじめて家族揃って、今年は休暇旅行にいけるんです。《喜びをとおして力を》というあれですよ。わたしが党員だからというので、このあいだまた、さらにいい職場をすすめられたりね。シュナイダーさん、わたしがNSDAP（国家社会主義ドイツ労働党・訳注）の党員になったのは、そうすればわたしたち家族のためになると思ったからなんです。」

「いや、よくわかります。ほんとうによくわかりますよ、たぶん、―もしわたしがユダヤ人でなければ、わたしだって―きっとあなたがされたと同じように、身のふり方を考えたと思いますよ。しかし、わたしはユダヤ人だ」

民衆は生活者として生き、自己と家族の「安定」のために生きる。これは言うまでもなく、あらゆる社会の構成の基礎である。だが同時に、この過程がまさにそれ故に例外者への加害（差別）として機能せざるをえない情況がある。「黙って生活する」生活者の論理と例外者への排除（破壊）との間は、ただ紙一重の差に過ぎないのかも知れない。これは一面で権力の強制の結果であり、同時に強制を内面化して同調する生活意識の質の問題である。ファシズムは、民衆に内在する差別の萌芽を増幅し、例外者を絶えず作り出すことによって「結集」をうながし、紙一重の大切な差を眼をつぶって飛びこえることをうながすのだ。つまり、民衆はファシストになることを強制されると同時に、自らファシストになるのである。このとき〈抵抗〉とは何を意味するのだろうか。民主主義原理を基礎にした組織的な反ファシズム戦線の構築。おそらくこれは正しいのだろう。だが民衆の内にある抵抗と同調の両義性から「反ファシズム戦線構築」への道には、なおいくつものつなぎ目（媒介）が必要だと思われる。そのひとつは、この物語に即していえば、二つの家族に間に流れていた〝共感〟と〝友愛〟の力の回復であり、「安定した生活」との緊張を含む「共感の生活」（人間として生きる論理ともいうべき開かれた関係性の回復）の自覚化のように思われてならない。

一九五〇～六〇年代がいわば「大状況型」ファシズム認識（例えば「天皇制ファシズム論」）の時代であったとすれば、七〇年代は、民衆（暮らし）、女性、子ども、在日朝鮮人など個別的な「小状況型」ファシズム認識の始まりの時代といえるかも知れない。その意味で現在は、両極を見すえながら、ファシズム認識を総合化せしめる課題の入口にようやくたどりついたといえるのではないだろうか」

（安田常雄「民衆のファシズム」（『思想の科学』一九八一年五月号、のち安田常雄『暮らしの社会思想』勁草書房、一九八七年に所収）

この「参考資料」に一つだけコメントをつけるとすれば、この文章を

書いた前後、私は「思想の科学研究会」で小さなサークルをやっていた。それは渋谷定輔、後藤宏行、輿石正、太田幸夫、そして私の五人と時々鶴見俊輔さんにも来てもらっていた。その会は、渋谷さんが若い頃からこだわっていた「自然成長と目的意識」をテーマにした勉強会であった。周知のように「自然成長と目的意識」というテーマは、戦前のプロレタリア文学の「論争的」テーマであり、青野季吉は、渋谷の「野良に叫ぶ」などの詩がすぐれたものであることを認めながら、そこに理論的な目的意識がつけ加わることが必要だと考えた。この研究会では、同時代の文献などを読みながら、「自然成長」の内実をどのように考えるかなどを議論していた記憶がある。その問題は、「生活」あるいは「生活史」を目的意識論との関わりでどのように考えるかに密接に関わっていたし、前述の「民衆のファシズム」論と響き合うテーマであった。

当時その会の中間報告として、私は「自然成長の復権」という文章を書いているが、それは、個の内発性（多様性）を軸に、知識人、理論、統一を疑い、新たな枠組みを作りなおすためには、個の多様性が生きて働いている場である生活そのものを、自然成長論の立場からいかにとらえるかが重要ではないかという文脈で次のように書いていた。

「目的意識論の立場からとらえれば、階級社会において生活とは商品物神によって根底から規定される支配の網の目であり、これは外部からの目的意識の注入によってしか克服できないといわれます。その意味で、日常生活論は、日常生活批判としてのみ成立することになります。しかし、自然成長論から見れば、批判もまた日常生活の実態を基盤にしなければ力をもちません。つまり、問題は日常生活の支配と批判の両義性をいかにとらえるかにしぼられてきます。この場合、特に重要なのは、日常生活を一枚岩のものとして捉えるのではなく、日常生活を重層的なものと捉える視点と思われます。これは、八二年一〇月、京都での例会のときに、鶴見俊輔さんの特に強調された点でした。つまり、日常生活には表の部分と影の部分があり、自然成長とは何よりもこの影の部分と密接に関わっています。これに対し、目的意識は表の部分、しかも表層の浅い部分とのみ関連を持つにすぎません。いいかえれば、自然成長とは日常生活の影の部分（深層）とのたえまない対話ということになります。知識人によって想定され、固定化された大衆の像ではなく、生活者大衆の底にあるもの、定式化された理論によって完全には表象されない民衆の感覚と実践、またひとりひとりの生きた民衆個人の内にある多様な生命感覚。これらの自然成長的要素は、日常生活という具体的な場で人間存在の深層から、自分自身をたえず押しあげてくるものとして存在しているといえます。それはあるいは、人間生命の根幹にある遺伝子にまでさかのぼるのかもしれません（鎮目恭夫『自我と宇宙』）。

（安田常雄「自然成長の復権」『思想の科学研究会会報』№109、一九八四）

ここで提起された「表層の生活」と「影（深層）の生活」との重層性という視点は、「方法としての生活史研究」を考えるキーワードとなるだろう。つまり私たちが普通イメージする「生活（史）」を「表層の生活史」とすれば、その奥（基底）に「深層の生活史」ともいうべき次元が内在しているのであり、それは、生活者の身体的基底からそれぞれの「生活者」

を押し上げてくるものと考えられる。この「方法としての生活史」の視点は、高度成長以後の日本においても、高度大衆社会下の「消費生活史」の「表層」の奥にあり、「表層の生活史」を相対化し、内部から批判しうる暮らし方の問題として、依然現代的な意味をもっているのではないだろうか。

三　歴博「現代展示」における「生活史」の歴史叙述

私個人の研究の流れのなかでいえば、一九九〇年代から二〇〇〇年代にかけては、研究対象を戦前の「ファシズム民衆史」から、戦後の「民衆史」に転換していった時期であった。その間、占領から高度成長へ、さらに一九七〇年前後の地域住民運動などに関する文章も少なからず書くことになったが、そうした歴史に即した記述と同時に、それがもつ方法的な問題への関心は、消えずに残っていた、あるいは存続していたのではないかと思う。

そうしたなかで、偶然的要素もあって、私は国立歴史民俗博物館研究部（以下、歴博と略称）に転勤することになった。平成十五年（二〇〇三）のことである。当時、歴博では、永年懸案であった総合展示「現代」にいよいよ着手する時期であり（総合展示「近代」はこの数年前までに、一九二〇年代の関東大震災あたりまでは完成して展示がオープンされていた）、私は総合展示「現代」（満州事変から敗戦を経て、ほぼ一九七〇年前後まで）の「代表」として、展示構想、資料収集などにたずさわることになったのである。

当時、歴博では「現代展示」のキーコンセプトとして「「生活史と文化」を軸に日本の歴史を展示する」が掲げられていた。このキーワードについて館内や関連する委員会でどのような議論が行われたか、いまほとんど記憶がないが、同時代の日本では、教科書問題とも絡んで「歴史修正主義」的言説が一つの潮流をなしていた時代でもあり、その意味で、政治的文脈が問われる「戦争展示」（あるいはその外部への反響）には相当敏感な空気が底流に存在していたと思われる。その意味で、「生活史展示」というコンセプトは、その外見的中立性による防御的ニュアンスをもっていたとも思われる。

しかし問題は、それでは「戦後日本」を「生活史」的にどのように構成するかにあり、そのためには「生活史」とは何か、どのような対象として表象するか、といった、いわば「方法としての生活史」とは何かが問われなければならない。

そのとき私が考えたのは、〈大衆文化〉を切り口に「戦後日本」という世界を対象化することであり、それが「生活史」を包摂する切り口であるという直観であったように思われる。それは、すでに触れてきたように、「生活史」とは、通常イメージされる衣食住を軸にした「モノ」に関する物的な生産と消費に関わるだけではない。そこには、人間の意識や感覚、思想を含む精神世界も「生活史」の重要な主題であるからである。そしてあえていえば、人間の生活世界は、物的な生産と消費を必要とするだけではなく、「虚構」を必要とするのである。ここで「虚構」とは、夢や理想を含み、「いまいる自分」とはちがう「自分」への転生の萌芽を含むからであろう。一般的には、大衆文化の「虚構」性は、マスメディアに象徴されるように、大衆を塊としてある方向に誘導するプロパガンダと同一の性格をもちつつ、同時に個々人の固有な「生活史」

を基盤に生まれ、「もう一人の自分」への萌芽を内在させているものであろう。その意味で「大衆文化」は、そこで生まれたイメージや表象が、私たちの生活を引っ張る牽引力をもち、幾重にも媒介された「政治性」を含むものとなる。

この歴博第6展示室の「戦後日本」展示については、オープン後約十年になるが、現在もご覧いただいている。またこの展示の制作過程の詳細については、いくつかの参考文献もでているので、参照いただければ幸いである。

ここでは紙数の限界もあり、やや展示ガイド風になるが、その主な展示資料の基本コンセプトの概略を概説しておきたい。

この展示の基本コンセプトは、「大衆文化から見た戦後日本のイメージ」とされ、その内容は、次の五つの視角から構成されている。

その第一は「喪失と転向としての戦後」。ここでは映画「浮雲」(一九五五年東宝、成瀬巳喜男監督)セットの再現がおかれている。主人公ゆき子が住む三畳一間、粗末な板壁とちゃぶ台が設置され、それは戦争中を南部仏印で過ごし、日本に引き揚げてきた主人公の「喪失」の戦後「生活史」の象徴であった。またこのコーナーでは、戦後、代々木練兵場で割腹自殺した大東塾員の資料、天皇制の転換に関わる資料、占領期の「熊沢天皇」関係の資料などが展示されている。

第二は「冷戦としての戦後」。ここでは、占領期のGHQ東京地図、マッカーサーへの手紙などとともに、占領期アメリカニゼーションを象徴する、英会話ブーム、その象徴ともいうべき漫画「ブロンディ」、オキュパイド・ジャパン製の日本商品、その他、米軍基地関係、特に沖縄関係の資料が展示されている。

第三は「民主主義としての戦後」。ここでは、壁面を大きく使って戦後雑誌創刊号コレクションの展示が目を引く。またカバヤ児童文庫や山川惣治の絵物語や、戦後の重要な週刊誌記事が貴重である。

第四は「中流階級化としての戦後」であり、ここでは高度成長期の団地ブームを象徴する「赤羽台団地」の実物模型、そして、テレビ時代については、テレビスタジオの再現模型がおかれ、そこから多様なTV・CMが流されている。またこの時代は、列島規模で「人の移動」が盛んであり、その陰で炭鉱の人びとの「生活史」や水俣の「水俣病を告発する会の運動」と「生活史」が展示されている。特に水俣展示では、坂本フジエさんとしのぶさんから寄贈された巡礼衣装一式、「水俣病を告発する会」の「怨」の旗、元水俣病市民会議の日吉フミコさんから寄贈された御詠歌の教本、御詠歌用鈴鉦、撞木などが展示されている。なお、この「現代展示」オープンの当日、車椅子で観に来てくれた坂本フジエさんは、令和元年(二〇一九)十月十三日、逝去された。

第五の「忘却としての戦後」は、「原爆」と「沖縄戦」である。「原爆」展示では、昭和二十九年(一九五四)に生まれたゴジラの実物模型を展示している。これは、ゴジラVSシリーズを担当した、造形の小林知己さんによって製作された「ゴジラ像」が立ち、その対面壁には、沖縄の比嘉豊光さんによる「島クトゥバで語る戦世」の「聞き書き映像」が流れている。残念ながら、小林知己さんは展示オープン直前に亡くなられた。

その意味で、「展示」とは一つひとつの資料が、文字通りその現場を生きた人びとの「生活史」そのものであり、またその復元やそれに携わった多くの人びとの「生活史」の表現でもあったのである。

四、結びにかえて

本論考は、これまで折に触れて書いてきた広義の「生活史研究」に関する文章をたどりなおしながら、やや回想的ではあるが、それぞれの時点での私の問題意識の歴史を素描しようとした。その中心的論点は、「方法としての生活史研究」という視点である。すでに周知のように「生活史研究」はさまざまな学問分野において、いまなお活発に展開されている領域であることはいうまでもないが、ここで強調してきた「方法としての生活史研究」は、具体的な生活者に即して、単に「素材」としての「生活史」の克明な記述という意味ではなく、どのような視点から「生活史」をとらえなおすことが必要か。別の言い方をすれば、「生活史研究」は、どのような視点を含むことによって「方法」となるかという問いであろう。

それらの観点は、すでに触れたように、第一に抽象的・一般的原理によって「生活史」を規定するのではなく、生活という具体的なありかたと一般原理との不断の往復運動によって、一般原理を相対化しつつ、一人の生活者にとっての生活史をとらえなおすことにつながる。

その上で本稿では、第一に「方法としての生活史」は、あくまで個人の生活と思想の相互関係を対象化するものであること。あるいは「方法化」されることによって、自分にとっての「生活史」の「意味」が対象化されるといってもよい。

第二に、「方法としての生活史研究」は、複数の人びととのつながりのなかにおかれており、それはサークルや社会運動だけではなく、広く「つきあい」という人間関係を支える根幹にあるものであろう。本稿では、コミュニケーションとしての「生活史研究」という言葉も使っている。こうした「方法」の問題とは、その主体である「自分」に即していえば、「自分という場所」にはたくさんの「他者」が数珠玉のようにつながっているイメージにも見える。それはいいかえれば、「社会」ということなのであり、一人の個人からたくさんの「他者」との「つながり」というイメージに連なる根拠になっているにちがいない。

そして、第三には、このような「自己」（個人）から「社会」につながる「コミュニケーション」を支えているのが、「自然成長」という用語でイメージされる「自己」の身体的・他者応答的「基底」なのであり、高度大衆社会下の情報操作によって作られる「表層の生活」に対する批判的相対化（「深層の生活」）の「萌芽」となるのではないだろうか。

〈参考文献〉

鶴見俊輔『プラグマティズム入門』現代教養文庫、一九五九
鶴見俊輔ほか『日本の百年』筑摩書房、一九六一～一九六七、特に第一巻（新しい開国）の「解説」
ウイリアム・S・アレン、西義之訳『ヒトラーが町にやってきた』番町書房、1972。原書は、William Sheridan Allen, “The Nazi Seizure of Power: The Experience of a Single German Town 1930-35”, Quadrangle Books, 1965。
安田常雄『日本ファシズムと民衆運動』れんが書房新社、一九七九
安田常雄『出会いの思想史＝渋谷定輔論』勁草書房、一九八一
安田常雄「自然成長の復権」『思想の科学研究会会報』№109、一九八四
安田常雄『暮らしの社会思想』勁草書房、一九八七
安田常雄「民衆のファシズム」（『思想の科学』一九八一年五月号、安田常雄『暮らしの社会思想』勁草書房、一九八七年所収）。
国立歴史民俗博物館＋安田常雄編『歴博フォーラム 戦後日本の大衆文化：総合展

示第6室〈現代〉の世界3』東京堂出版、二〇一〇年
安田常雄「近現代展示論――歴博「現代展示」の経験を通して――」『岩波講座 日本歴史第21巻（史料論 テーマ巻2）』岩波書店、二〇一五年

著者プロフィール

安田常雄（やすだ・つねお）昭和二十一年（一九四六）東京都生まれ。東京大学大学院経済学研究科博士課程単位取得退学。アメリカ西ワシントン大学東アジア研究科にて講義・研究。帰国後は鹿児島大学法文学部助教授、電気通信大学電気通信学部教授、国立歴史民俗博物館教授、副館長などを歴任。平成二十四年より神奈川大学特任教授。思想の科学研究会会長を長く務める。現在、国立歴史民俗博物館名誉教授。経済学博士。
主な著作に『日本ファシズムと民衆運動』、『出会いの思想史＝渋谷定輔論』、『暮らしの社会思想』、編著『歴史研究の最前線〈Vol. 3〉新しい近現代史研究へ』、共編著『日本生活史辞典』、『思想の科学・芽』などがある。